

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

- 日 時 令和8年5月21日(木) 10:00～10:38
- 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者 宮園議員、梶原議員、佐藤議員、菅議員(W e b)、鈴木議員、波多野議員、光石議員  
(事務局)  
濱野事務局長、井上統括官、宇野総理補佐官(W e b)、福永統括官、恒藤審議官、馬場審議官、原審議官、岩渕参事官  
小安文科大臣科技顧問、大野経産大臣科技顧問、藤吉サイバーセキュリティ・政策立案総括審議官(W e b)、松田内閣府審議官(W e b)  
豊田研究振興戦略官(人工知能活用担当)、池田参事官(情報担当) 補佐、赤池参事官
- 議題 「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」の推進状況等について

○ 議事概要

午前10時00分 開会

○岩渕参事官 それでは、定刻となりましたので、木曜会合を開催いたします。

本日は、菅議員がオンラインで御出席となっております。また、伊藤議員は御欠席と承っております。

初めの公開議題でございます。「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」の推進状況等ということでございます。

文部科学省様より御説明をお願いいたします。それでは、お願いします。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

文科省に4月から新しくA I担当の部署ができました。初代の課長、豊田と申します。よろしくをお願いいたします。

「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」を文科省の方で3月に策定してございます。取りまとまる前の2月にこの場で御議論いただき、それを踏まえて策定しています。その後、補正予算関係で研究事業を進めており、そのあたりの進捗、公募開始をしておりますのでその情報、加えて、概算要求関係について、今後考えていることを共有させていただきたいと思っております。

まず、1ページ目でございますが、「AI for Scienceの推進に向けた基本的な戦略方針」では、今後5年間を集中改革期間とし、正に科学技術・イノベーション計画と軌を一にして集中期間として捉えてございます。

次のページをお願いします。2ページ目でございますが、今後5年間を集中改革期間として、20のアクションプランをつくってございます。その中で日本の強みということで、情報基盤とか、あるいは研究基盤、社会基盤を捉まえて、目的のところに書いてございますが、質の変革とか、あるいは研究力の抜本的強化、国際優位性の確保というところを目的として、オランダのところでございますが、先端的成果創出、あるいは研究開発期間を10分の1にということを目標として掲げております。

ターゲット例のところに具体的なものを掲げております。新素材開発、バイオ生成基盤モデルの開発、大型研究施設・研究装置の自動化・自律化、このあたりが日本の強みということもあって、ターゲット例として示させていただいております。

具体的な取組内容のところは、その下のカラフルなところですが、研究力・人材、計算資源、研究データについて、20のアクションの主要なものを右側に記載してございます。

具体的には、その左の三角形のところですが、二つの方向性で事業を進めてございます。一つは、裾野拡大。あとはトップ研究を更に引き上げるという、この二つの方向性で考えてございます。

次のページ、3ページ目でございますが、その戦略方針の中でKPIを設定してございます。もちろん研究を進めるに当たって、まずその基盤に当たるところをしっかりと整備していかないと、ということで、データ基盤と流通基盤と計算基盤とありますが、それぞれ計算資源を10倍に、SINETを2倍高速化、NII RDCのデータ容量を5倍になど、そのあたりをしっかりと整えた上で、研究の部分について、アプリケーションやAIモデルのところをしっかりと進めていく。研究のところ例えばですが、Top 10%論文の順位を世界3位へと、今10位ぐらいだと思いますが、そこへ引き上げていくとか、あるいはAI高度研究人材を5年間で3,000人増やしていくということ掲げてございます。

もう一つは、4ページでございますが、それを推進するに当たって、その研究データの扱いをしっかりと整える必要があるということで、オープン・アンド・クローズ戦略の下ですが、研究データの分類ということで、公開とするものとか非公開とするもの、その両者を慎重に検討すべきものというところを考慮しながら、チェックリストという形でそれぞれの体制とかそのデータの扱いのところをしっかりとチェックしていただくようになっている。これは研究者とか研究機関でしっかり定めていくことをお願いしているところでございます。

5ページ目が、先ほどの三角形のところの話で、裾野拡大のところはSPReAD1000ということで、これは1,000件、裾野のところではまずAIを使っていたらこうということで考えているものでございまして、第1回公募が今終わったというか、公募期間が終わり、現在審査中でございますが、第2回公募が6月にもう一度あります。

応募件数かなり多数にわたってございまして、近々その応募件数等も含めて公表する予定でございまして、アカデミア、産業界含めて、かなり関心が高いということが分かってきております。

ARiSEの方はこのトップ研究ということで規模は大きく、5月12日に公募を開始しております。

6ページをお願いします。こちらはSPReAD、裾野拡大の方の概要でございまして、あらゆる分野、人文社会とかも含めた形で公募をしております。対象者も大学の学部生や高専生を含めて応募でき、500万程度を半年程度ということで公募を今1回、2回と進めているところでございます。

7ページでございますが、こちらがトップ研究を引き上げるARiSEでございまして、左側の戦略ターゲット型というのは先ほど事例で示した三つのところを、マテリアルとかバイオとか大型研究施設・研究装置というところを想定していて、国際・融合型が全ての分野ということで、少しボトムアップ的なのですが、そこで勝ち筋をつくっていけるようなものを探していくということを考えております。

それらが今進めている事業でございまして、8ページ目でございますが、次の戦略として考えていることでございまして。AI for Scienceを支える次世代研究インフラの構築ということで、実験基盤とかデータ基盤とか計算基盤のところを、パイプラインと書いていますが、研究者それぞれその共通認証システムみたいなところをつくりながら、頭脳に当たる基盤モデルだけではなくて、それぞれのタスクを行えるようなエージェントAIを開発しながら、実験を含め、かなり自動化していくというようなものがつくれないかなと考えてございます。

9ページ目の海外の動向を見ても、アメリカ、韓国あたり、正に彼らもまだ構想段階ですが、

同じようなことを考え始めているので、全て自国でやるかどうかはちょっと見極めは必要かと思いますが、国際競争になってきておりますので、しっかりやっていきたいと考えております。

最後に少し御紹介ですが、12ページ、13ページに、自民党の方でもAIホワイトペーパーというのをまとめていただいております、その中でもAI for Scienceについて取り上げていただいております。

その中で、13ページのところのオレンジのところですが、そこで予算の規模感を、唯一ここだけ書かれているわけですが、今後5年間で1兆円規模ということで、記載いただいております。基盤あるいは研究、それぞれやるべきことが多くあるので、こういうことも踏まえながら、政府の方でもしっかり対応していきたいというように思っております。

御説明は以上でございます。

○岩渕参事官 ありがとうございます。

それでは、この後意見交換の時間としたいと思います。まず、有識者議員の先生方からいかがでしょうか。光石議員。

○光石議員 御説明ありがとうございます。

オープン・アンド・クローズ戦略ということが書かれていて、ここでも何回か出てきていますが、明確にどの辺が境界かということが示されないと研究者も迷うのではないかと思います、そのあたりいかがでしょうか。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

分野によってもオープン・クローズ戦略が違うのではないかと考えており、正に国プロ、先ほどの例えばARiSEみたいなところで今後進めていくわけですが、そのあたり一般論では議論は深まらないのではないかと考えており、ドメインあるいは課題ごとなどでしっかり何のデータを守って、何のデータをオープンにして、どういうところがメリットとしてあるのでデータをオープンにして、それで例えば基盤モデルをつくるのか、その基盤モデルをどう活用するのかとか、そのあたりをそれぞれで議論していかないといけないと考えております。

○光石議員 ある程度明確に何か示していただく必要があると思いますというのが一つ。

分野横断がある意味では強調されているように思えますが、それがどれぐらい寄与するのでしょうか、ある分野特定とどう役割が違うのかというあたりはいかがのでしょうか。

○豊田研究振興戦略官 分野横断、役割が違うとは。

○光石議員 分野横断の方がいいのか、ある領域でAIを使って進めることであればそれもいいのかは、このAI for Scienceの中ではどのようにお考えでしょうか。

○豊田研究振興戦略官　そうですね、かなり振興分野というか、AIを起点としていろいろなフォーメーションがあり得るかなと思っています。今一旦我々も専門家含めた議論の中で、ライフとマテリアルと大型研究施設・設備ということで設定していますが、それだけではないと思っており、分野横断的なメニューもつくってございまして、その中で出てくるんだろうなというように思っています。それは個別で、それが果たして勝ち筋になるのかどうか含めて議論していきたいなというように思っております。

○光石議員　ありがとうございます。

○岩渕参事官　佐藤議員。波多野議員からお願いします。

○波多野議員　すみません、お先に失礼します。

ありがとうございます。AI for Scienceは大学でもかなり浸透してきており、今回の公募も件数が非常に多くなるのではないかと予想しています。

その一方で、私がかねてより危機感を持っているのが、AIの進化の速さとブラックボックス化です。特に昨今の「AIエージェント」などの領域において、AIの仕組みを本質から理解し、開発・制御できる人材を、国内のアカデミアでも早急に育成しなければならないと感じています。本学のケースで恐縮ですが、学内にトップ研究者は数人いるものの、彼らからもAIのトップカンファレンスに日本人の参加者が少ない、という声をよく耳にします。

そこで、資料6ページのレイヤー図に関連して伺いたいのですが、AIを応用する「AI for Science」が広がる一方で、その土台となる「Science of AI」や「Science for AI」といった、AI自体の基礎研究のレイヤーへの投資が、今後日本には不可欠ではないでしょうか。このあたりの強化策について、お考えをお聞かせください。

○豊田研究振興戦略官　基本方針の中で正にその部分も重要だということが触れられていまして、今回の先ほど御紹介させていただいたプログラムはどちらかというとAI for Scienceの方なのですが、AI for AIのところも、例えばAIPセンターのプログラムや、あるいはまだ十分ではないと思っておりますが、NIIの方で基盤モデルを開発するような予算を含めてやってございます。

そのあたりも強化していかないといけないなとは思っておりまして、そのあたり概算要求含めて検討してまいります。

○波多野議員　ありがとうございます。

○岩渕参事官　佐藤議員。

○佐藤議員　ありがとうございます。

何点か御質問させていただきます。まず一つは、データの取得の問題ですが、先ほど触れられたように、アカデミアの中だけのデータでなく、産業界のデータを持ってこなければなりません。どうやって産業界からの協力を得ようとしているのか。大体データ出したがらない人たちが多いわけですから、そこが非常に大きなネックになる可能性があるのです。その点どうかということですね。

それから、二つ目は、今波多野さんがおっしゃったこととほとんど同じですが、Science for AIの方は一体どういうふうになるのかなということ、これ並行して進めなければいけないので、何か別の戦略をこれから考えていくということなのか。

それとの絡みでいうと、成長戦略の中でAI・半導体というグループがあるので、その中で3回ぐらい議論をやっていて、その内容が6月の成長戦略に入ってくると思います。その成長戦略の中に入ってくる内容と、ここで議論している内容との間での整合性というのはどうやって図られていくのかということが大きな意味で2番目です。

最後3番目は、予算の考え方なんです。ARISEで50億、それからSPReADで320億という話。

○豊田研究振興戦略官 逆です。

○佐藤議員 逆ですね。これは単年度の話をしておられるんだと思うんですが、今年のですよね。

○豊田研究振興戦略官 ARISEの方は3年間プログラムです。

○佐藤議員 もう一つのSPReADの方は。

○豊田研究振興戦略官 単年度です。

○佐藤議員 それぞれ3年と1年ということでとても終わるような話ではないように思います。そうすると、全体の予算の考え方が良く分からない。例えば今おっしゃったように、SPReADが単年度予算だとすると、プロジェクトは一年では終わらないにも関わらず予算的には取りあえず1年間取っておく、そういう考え方になっている可能性があると思います。恐らく今度の成長戦略の17分野というのはそういう問題に直面しているのではないかと思います。したがって、御説明いただくときに、予算面でどういう議論が行われているのかというのを教えていただかないとよく分からないことになってしまいます。

この辺りのご説明を、お願いいたします。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

まず1点目の産業界とのデータの連携のところは、正に経産省さんとコミュニケーションを

始めています。おっしゃるとおり、なかなかデータを出さな、出したがらないというのはよく分かっております。メリットを感じないと企業さんもデータを出さないということかと思っ  
ていまして、そのメリットをどうつくるのか。それは恐らく個別のプロジェクトとか課題ごとに  
そのメリットをつくっていったって、データを出していただいとすることを考えないといけ  
ないと思ってるのですが、例えば基盤モデルをつくる時に、やはり1社さんだけではつけれ  
ないような性能をお互い出し合ってつくることで、その基盤モデルを還元し、その会社で  
使えるということの下でやるのであれば少し可能性が出てくるのではないかなど、そうい  
う議論をしています。正に官民のデータ、アカデミアと民間のデータをどう連携させて  
やっていくのかというのは議論をしているところでございます。

○佐藤議員 恐らく今の話は決定的に重要で、やはり企業側あるいはアカデミアも  
そうですが、出したデータは自分固有のデータなので、そこから取れるリワードが何  
なのか、場合によっては知財、そういったものが明確になっていないとデータ出さ  
ないんですよね。それを経産省が間に入ってやるというのは当然あり得る話だし、  
今後もそうなるのだと思います、そうすると、どういうインセンティブを  
経産省が、企業に与えられるのかというところまでセットアップしないと、  
抽象的な話ではデータは出さない。ということになってしまう。そのところは  
これから検討ということに当然なってるんだと思うんですが、それこそこの  
プロジェクトの設計上の重大な問題であるということも、もちろん御認識されて  
いるわけで、そこをどういう形で経済界とコミュニケーションしてつ  
くっていくのかということも是非精力的にやっただく必要があると思  
います。

経済界って1社2社ではなくて、塊でありながら1社1社違ったりするとい  
う面倒くさいところなものですから。是非精力的にやっていただきたいと思  
います。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

3点目の方の予算の方の話ですが、もちろん我々としてはこの分野は、かなり  
拡大していかないと認識しています。今の予算自体はその中で財政当局との  
調整の中で一旦セットされていますが、このあとにそれぞれ公募をしてお  
りますので、そこに具体玉で実際どういうものがあるのかや、あるいは  
今回それぞれのメニューで単価等を設定していますが、これを取っ  
払ったときにどこまでのことができるのかなど、広く情報を集めて、  
それに基づいてしっかり要求していきたいと考えております。

我々も単発で終わるつもりはなく、状況をちゃんと見極めながら、どこ  
までいってもそういう具体玉がどれだけあるのかという把握をしないと、  
なかなか予算化につながっていかないの

で、そこはしっかり情報を取りながらやっていきたいというように思います。

○佐藤議員 それでよろしいんですが、こういうプロジェクトを対外的に、あるいは国民に対しても説明するようなとき、あるいはお役所の中でもそうですが、このスパンがどうなのかということ是非常に大事なので、今おっしゃったような考え方があるのであれば、取りあえずこうなると、だが、こうなんだというところはやはりちゃんと見せていかないと、プロジェクト全体の姿が見えてこないの、そのようにできるだけしていただきたいと思います。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

○岩渕参事官 梶原議員。

○梶原議員 ありがとうございます。

皆様の質問を伺いながら、正にそのとおりだと。同じ質問になる部分がありますが、産業界のデータの話はずっと課題になっていて、一般的にはデータは出ていないという格好になるのかもしれないですが、事例的なのが本当はないですかって思います。あれば、それを早く好事例として示していくべきかと。今に始まった問題ではなくて、ずっとそれが続いているということが実は実態を捉まえていないことがあるのではないかと思います。抽象論になっちゃって、もう少し具体的な産業界のデータ、あるいは部門によって実はあるということを早く見せていただく必要があるなと思っています。

それから、Science for AIについても、AI for ScienceとScience for AIの重要性を話題にするものの、やはり活用が遅いということで、AI for Scienceが先に来ます。目標のところ、AI高度研究人材3,000人と掲げている人材は、どちらの人材ですか。Science for AIの方ではないのでしょうか。ここで言うターゲットと目標が少しずれているような気がしますし、やはり一体的に御説明というか、この中のこの部分を今示している、AI for Scienceの中でも5年間はこうだが、先ほどの予算の話に対応し、まずはここで動き出すというように説明していただく方がすごく分かりやすいと思って聞いておりました。

チェックリストですが、新しく起きた科学研究革新プログラムというものだけに適用ではなく、普遍的に提供していくことが必要だと思います。このチェックリストはこのためだけに使うのでしょうか。横展開というか、ほかのところにもデータを使うところで必要なことだと思いますが、いかがでしょうか。

○豊田研究振興戦略官 はい、そうですね。まず前段のAI for AIですが、その部分とあと人材育成のところは、やはりAI for Scienceと両者を含めて3,000人というように一応定義はしています。

そのアプローチについては、我々もしっかり検討すべきであり、夏に向けて具体化していきたいと思っております。

チェックリストの方は、一旦はAI for Scienceでデータ周りのことが非常に常々出てくる状況になるので、一旦このように設定しております。横展開をするかどうかというのは、恐らく政府全体のデータの扱いとうまく連携しながらも、これで一旦走らせていただいて、その状況に応じて、できるだけ広げていけたらいいなとは思っております。そこは状況を見ながら、内閣府さんとも連携してまいりたいと思います。

○赤池参事官 内閣府から、失礼いたします。

研究データの取扱いにつきましては、約5年前に、「公的資金による研究データの基本的考え方」として一応の国全体の考え方を策定しておりますが、時期的にも見直しを検討すべき段階に来ており、その点について検討を進めていく必要があると考えてございます。

また、当該、基本的な考え方では一般的な内容にとどまっているところ、今回、文科省の方でチェックリストという形で整理いただいたことを踏まえ、これを他府省の事業にも適用可能かどうか、あるいは事例の蓄積に応じてより具体的な枠組みの構築が可能かどうかといった点について、文科省をはじめ関係府省と連携しつつ検討してまいりたいと考えてございます。

○岩淵参事官 まずオンラインで菅議員から手が挙がってましたので、それでは、菅議員、よろしく願いいたします。

○菅議員 ありがとうございます。

ちょっとネット環境が悪くて声がよく聞こえないかもしれないので、御容赦ください。大丈夫ですか。

○岩淵参事官 はい、大丈夫です。

○菅議員 非常にプログラムは活発で、私頼もしいなというか期待はしているわけですが、ちょっと私から付言というか、申し上げたいことが一つありまして。AI for Science、つまり我々に対するAIの活用というのをもう少しファンディングエージェンシーとかでも、もっと導入してほしいなと思っています。

それは、未だに我々報告書書くときに、エクセルにその年の論文発表を一々コピーして貼り付けて、コピーして貼り付けて、ずっとやるんですよ。これってものすごく時間かかります。こういうのこそ本当にAIで、自動的にダウンロードしてもらい、研究者はダウンロードできない成果報告に集中させていただくことは、研究者の研究時間の確保につながりますし、研究者にとっては本当の意味でAIが活用されているという気がします。

報告書等にできる限りA Iで片づけられることは全部片づけさせて、研究者に対して報告書を書くときは、本当の成果を文章化したものだけにさせていただけるように、文科省の方で動いていただきたいなと思っています。

これ何か話が少しずれているようですが、実は本当にA Iの活用をしていただきたいと思っているのは、ひょっとしたら我々サイエンティスト側の方かもしれません。省庁にもっと活発に活用してほしいなと思っているということをお伝えしたいと思います。

以上です。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。

恐らくいろいろな活用の仕方があると思います。その話とは少し異なりますが、実はSPReADの方で、膨大な申請件数をどう裁くのかについて、A I面談を取り入れてみるなどしており、そういった取組を将来的には例えば科研費等の審査体制に組み込めないかなども検討しながら、トライアルな取組も始めています。先生がおっしゃったような視点も、何ができるのかというところを、初めは試行的にやりながら、できるところからやっていくという形で進めていきたいというように思います。

すみません、直接的ではないのですが。

○菅議員 それをできるだけ早くお願いします。非常に我々時間、研究者の時間をどれぐらい確保するかという問題が上がっておきながら、そこが全然スピードを上げて進められていないというのはとてももどかしいところがありますので、よろしくお願いします。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。はい。

○岩淵参事官 鈴木議員。

○鈴木議員 時間も限られているみたいなので、一つコメントと一つ質問をします。

コメントですが、今ちょうど内閣府もデータの信頼性とかそういうことに関しての手当をしようという動きをしていると思います。保証機関みたいな、保証センターを作ろうとかいう動きです。そういう中で横連携していく時に、既に考えられているとは思いますが、その辺、よくコミュニケーションをしながらやられていくといいかなというのがまずコメントです。

それから質問ですが、自民党のホワイトペーパーだと、5年で1兆円と掲げています。今日の文科省の説明だと、実際には基盤の方と、それからL L Mとか基盤モデルの方でものすごいお金が入らないと、結局そこは外に出ていくのではないかと考えています。これは文科省の方に言う訳ではないですが、全体像が見えない中で、このAR i S EとS P R e A Dと言われても、なかなか理解しがたいなと思ってしまうので、その辺の補足説明が欲しいと思います。

○豊田研究振興戦略官 各省ともこのA I時代においてどういうふうに対応していくかという、もちろんA Iを使ってどうするかというのもそうですし、各省事業の中でA Iをとということも各省やっておられますので、少しまた整理をしたいと思います。今日は、用意をしておりますので、またということですが。

それから、1点補足させていただきますと、先ほどの産業界のデータ事例といいますと、SIPの中でデータの活用の取組などもやっています、NIIも分散型で横でつなぐという発想、データE Xという思想の中でやっていますが、NIIもそのファミリーの中に入って、連携の体制を従来からやっておりますので、そういうところも深めながらSIPや各省との関係も少し整理させていただければと思います。

○鈴木議員 結構大事なデータソブリンティとかA Iソブリンティに繋がる場所なので、ここは日本のやり方、考え方を作っていく方がいいだろうと思っております。

○岩淵参事官 大野顧問。

○大野経産大臣科技顧問 どうも御説明ありがとうございました。

科学の再興という観点からいうと、AI for Scienceで基礎はほぼカバーできていると思うんですが、データのところは、安全保障や産業競争力というところもあって、今A Iを使わないと産業競争力も安全保障も成り立ちません。

そういうところをどうサイエンスの基礎力でカバーするかということが重要です。例えば今話題になっているクロード・ミュトスがあります。サイバーセキュリティの人材育成が必要だと言われているわけですが、パッチを当ててシステムを安全に動かす人たちだけを育成しても、この次に何が起こるか分かりません。やはりトップレベルでの研究をやっているチームが日本にいないといけない、サイバーサイエンスで。これをちょっと調べてみたら、ほとんどないんです。

今ないチームをつくらなきゃいけない状況なので、そこも是非視点として、AI for Scienceに入るかはともかく、文科省的に、大学の研究チームをつくるという意味で、文科省のお仕事になると思います。守りを固めるだけでなく、サイバーセキュリティって攻めるというと、言い方があれかもしれませんが、攻めたり守ったりしないと技術力も上がりませんし、研究力も上がらない。そういう世界をどうやってA Iも使ってつくり上げ、研究を振興するのかという視点を入れていただければと思います。

よろしく申し上げます。

○豊田研究振興戦略官 承知いたしました。内閣府とも連携して、そのあたり考えたいと思

ます。

○宮園議員 1点だけよろしいですか。

○岩渕参事官 宮園議員。

○宮園議員 皆様から全部質問があったので、一つだけ。

Top 10%論文のことが書いてありますが、この分野の人って論文書くのでしょうか。この分野の方々は、業績について大分考え方が違ってきてるんじゃないかなと思いました。

○豊田研究振興戦略官 そこはおっしゃるとおりのところがありまして、必ずしも論文で評価するのが正しいのかどうかという視点もあると思っていますので、そこもしっかり考えたいと思っています。

○岩渕参事官 ほかに御意見ございませんでしょうか。

光石議員。

○光石議員 すみません、2回目です。実際に、例えば、申請書を書いてみると、自分で書いた申請書と、AIを多少使ってブラッシュアップしたものとでは明らかにブラッシュアップした方がいいのですが、創造的なところに使ってよいかどうかということについて、いろいろな議論があると思います。しかし、AIがもし審査したら、AIがつくったものの方が明らかにいいわけです。そういうときに、昔でしたら、AIが出始めた頃は、AIは使ってはいけない、いかなものかというように言われていましたが、今は誰もGoogleを使ってはいけないと言わないですよね。Googleも今やAIが入っていますので。

今後こういうものを審査する上でどういう考え方で審査していくのでしょうか。

○豊田研究振興戦略官 そうですね、今時点でその明確な基準というのは、おっしゃるとおりないかもしれません。恐らくAIを活用してよりいいアイデアとか、あるいはAIそのものが立案するような時代になってくると思うので、そこは国際的な動向とか、どこまでいっても多分その競争みたいなのところもあると思うので、そこで日本自体が不利にならないようにしっかり対応していくということかなと思います。

恐らく活用をどんどん深めていくと方向に世界全体がなっていくのだと思います。そこは基盤モデルを使うとか、それこそエージェントAI使ってみるとか、それが標準になっていくのかなというように思っています。

○光石議員 はい。このプログラムだけではない、もう少し大きい議論になってしまうかもしれません。

ありがとうございます。

○岩渕参事官 では、最後に、波多野議員、お願いします。

○波多野議員 国際連携のあり方について、一点質問がございます。先ほどご紹介いただいたAIの国際動向を踏まえ、文科省として今後、AI分野の国際連携にどう取り組んでいかれるのか、その方針をお聞かせください。政府はこれまでに「ミュトス」の導入・活用といった連携を進めてこられたと思いますが、米国で始まった「ジェネシス・ミッション」などへの参画を含め、今後の国際的な共同研究や連携のビジョンについて、どのように考えていらっしゃいますか。

○豊田研究振興戦略官 そうですね、米国とは今年1月に文科省とDOEでSOI、意向表明書として、これから協力して進めていきますということを経済など、コミュニケーションは続けています。

その中で、例えばジェネシス・ミッションであれば、26の分野があるのですが、その中の日本がどこを協力するのもコミュニケーションを続けております。こちらは外交に関する話なので、ある程度まとまったときに、非公開の場で御議論していただこうかと思っております。

○波多野議員 はい、分かりました。引き続きよろしくお願いします。

○岩渕参事官 ありがとうございます。

それでは、この議題ここまでとさせていただきます。

文科省様、ありがとうございました。

○豊田研究振興戦略官 ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

○岩渕参事官 それでは、公開議題は以上となりますので、大変恐縮ではございますが、プレスの皆様方におかれましてはここで御退室ということでお願いいたします。

(プレス 退室)

午前10時38分 閉会